
唄き勇者

imaiwa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

儚き勇者

【Nコード】

N1232K

【作者名】

imaiwa

【あらすじ】

勇者は戦闘を繰り返すたびうちに、自らの異変に気づき始めていた。

（前書き）

ドラクエ風味。

「うっしゃー一丁あがり！」

戦士ハッサンが最後の魔物を倒すと、雄たけびを上げた。周りにいる仲間の僧侶ジンカー、魔法使いマールも、それぞれ一息つくなり、額の汗を拭って一時の休息に身を浸している。3時間ほど、魔物を狩りつづけて、さすがにメンバーの顔にも疲労の色が浮んでいた。しかし、一人だけ疲労だけとは思えない、濃く暗い影を顔に刻んで俯いている者がいた。

「どうしたの？ 勇者？」

その異変に気づきマールは勇者に気遣わしそうに声をかける。

「え？ あ、ああ……何でもないよ」

銀色の鎧を着こんだ勇者は赤いマントを翻し、メンバーに背を向けた。夕暮れの太陽に虚ろな眼差しを置いている。

「どうしたんじゃろな……」

マールの傍にいたジンカーが、マールにぼそつと呟いた。

「長旅で疲れたんじゃ……」

顔を見合わせ心配そうに二人は勇者の背を眺めている。

だが そんな雰囲気はハンマーでぶち壊すような勢いで、勇者に迫るものがいた。勇者の傍までズカズカ駆け寄ると、ハッサンは

勇者の背中を赤い金属の籠手をつけた右手で、思いつき叩く。

「どうした！ 勇者、元気ねーなー！ もっとしゃきつとしろよ！」

「あ、ああ……ハッサンか……」

「ん？ ど、どうしたよ！？」

ハッサンは勇者の顔を横合いからみてびびった。夕日を浴びて朱色に染まった勇者の瞳から、涙が止め処なく滴り落ちていたからだ。

「ハッサンは良いよな……単細胞で……」

「な、おま、ケンカ売ってるのか！？」

後ろにいるジンカーとマールの顔は、勇者の言葉で一瞬にして凍りつき青褪めた。ハッサンは肩をそびやかし、怒りで体を小刻みに震わせている。それを見て直ぐに後方の二人が駆け寄り、ハッサンを宥めにかかる。

「まあ、待てハッサン！ 勇者は疲れてるんじゃろ」

「落ち着いて、ちよつと勇者今おかしいのよ……」

二人でなんとかハッサンの怒りを静めようと、両肩にそれぞれ手を掛けて押さえ留める。その間、勇者はマントを右手でつかみ、眼元まで持ってきて拭った後、三步ほど歩いた先にある小岩に腰を降ろした。

「チッ、もういい！」

肩を大きく震わせ二人の手を振り解くと、ハッサンは勇者にそっぽをむいて、腕組みをしたまま口を閉ざした。

マールとジンカーは取りあえず治まりがついたので胸を撫で下ろす。

そして、ジンカーはマールに眼で何かを訴えかけた。そのジンカーの目配せを理解し、マールは勇者に静かな足取りで近付いていく。

「勇者、どうしたの？」

「マールか……」

背を前に倒して、股間の辺りで手をくんで、親指をすり合わせる勇者。その表情は陰々として、どこか悲しげにマールの瞳に映る。勇者は深く溜息を一度ついた。しばらく沈黙したのち、勇者は右耳にかかる金色の艶やかな髪を掻きわけながら、

「俺は死んでいるんだろ……？」

と、ぼそつと呟いた。

マールの瞳孔が途端に大きく開き、はっとしたように唇を少し開く。

「な！」

「勇者まさか……」

ハッサンの耳にも勇者の言葉は届いていた。一言発した後、勇者を顧みて絶句したまま立ち尽くしている。ジンカーはそれとは対照的に、眼を細めて険しい表情で、濃緑のローブを揺らしながら勇者に歩み寄る。

「勇者よ、いつから気づいてたんじゃ……？」

マールが何も言えずに勇者の後ろに佇む。その隣にジンカーはやつてくると、勇者を見下ろし静かに尋ねた。

「三日前さ……」

と、細く呟くと、勇者は更に低く暗い声で言葉を繋げていく。

「最初は気のせいかと思ってたんだ、だけど、俺の心臓の音がどうしても聞こえ無いんだよ……どんなに激しい戦いをした後でも息もきらないし、鼓動の音も聞こえない……おかしいだろ？」

自嘲気味に薄笑いを浮かべる勇者。

「そうか……気づいてしまったんじゃない……」
「そんな……」

ずっと黙っていたマールが気持ちを抑えきれず、目に涙を溜めながらぼつりと言葉を漏らした。そして、ジンカーの横顔を見やる。ジンカーは眼を閉じたまま押し黙っていた。

「おい、どういうことだよ！」

ハッサンがどかどかと巨体を揺らしながら、三人の元へやってきた。

その瞳は明らかに動揺して、左右に小刻みに震えていた。

「実はじゃな……」

と、ジンカーは前置きするかのように一言漏らすと、それを皮切

りに真相を語り始めた。

ジンカーの話によると、勇者は5日前の魔物との戦いで、胸を魔物がもつ剣で貫かれた。血を胸から噴出し倒れた勇者。それに直ぐに気づいたマールが魔物を炎の魔法で焼き払い退治すると、ジンカーに大声で叫んだ。

『ジンカー！ 勇者が……』

『こりゃいかん！』

勇者を仰向けにして、その上に掌を翳して、ジンカーは回復魔法を施す。掌から白い光が勇者の傷口に降り注ぐ。傷はそれを吸収するかの様に塞がっていった。一瞬明るみをその顔に浮かべるマール。だが、ジンカーの表情は強張ったままだ。魔法を使い終わるとそのまま掌を勇者の心臓に置き、直ぐに右手首をつかむ。しばらくその手をジンカーは離さなかった。しかし、太い白髪眉毛を八字型に下げると、手を勇者の手首からゆっくり離して、眼を強く閉じて目尻に深い皺を刻んだ。ジンカーの所作を一部始終見ていたマールは薄々何かを感じ取ったらしく、目尻に涙をためはじめた。

だが、マールの涙が頬を伝い始めたとき、不意にジンカーが重い口を開いた。

『仕方ない、アンデッドの魔法を使うか……』

「ハッサン……おぬしはその時離れた場所で魔物と一人戦っていたから、知らないのも当然じゃ」

「……」

「……」

「ジンカー……、アンデッドの魔法ってまさか……」

一時的に死んだ者を蘇生するアンデッドという魔法　その存在をハッサンはどこかで聞いた事があった。そして、その魔法の効果時間も知っていた。5日前のあの時も確か夕暮れ時だったことをハッサンは思い出す。すると、ハッサンは全てを悟ったのか、大きな体を力なく折り曲げ、右ひざを地につき顔を大きな手で包んだ。

「そろそろね……」

「……」

「……」

ここにいる全員が全てを悟った時、勇者は体の位置を皆に向けて微笑んだ。

「ありがと……お前たちの温かい心遣いは忘れない……」

「「勇者……」」

そう勇者が呟いた時、西の山の端に夕日が丁度、姿を完全に落とし込んでいった。

その瞬間　勇者の体は大気に交わるように消えていた。宙に置き去りにされた鎧が、鈍く重い音を立てて小岩に落ちた後、周りに生い茂る雑草に無造作に転がっていった。

（後書き）

昔ブログで書いた短編です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1232k/>

儂き勇者

2010年12月10日21時50分発行